

# 学校や公民館と連携した教育普及事業の取組

立川厚生

## 1 美術館としての教育普及の役割

美術館の役割の一つとして、教育普及事業がある。美術館が、学校や公民館のニーズに応え、共に子どもたちの文化芸術面の学びを支えていく環境を整え、学校や公民館に積極的に働きかけていくことが必要である。

国は文化芸術立国の実現を目指し、我が国の文化芸術の継承・発展・創造を担う人材の育成、子どもの文化芸術活動の充実等に積極的に取り組む方針である。

小学校学習指導要領「図画工作科」においては、鑑賞教育について次のように明示されている。「各学年の鑑賞の指導については、表現との関連を図るようにすること。ただし、児童や学校の実態に応じて、指導の効果を高めるため必要がある場合には、独立して行うこと。」「各学年の鑑賞の指導に当たっては、児童や学校の実態に応じて、地域の美術館などを利用すること。」

公民館やコミュニティセンターにおいては、地域の活性化や充実のために、幅広く子どもたちの活動の新たな展開を模索している。

本物の芸術を直接見て、感じて、味わうことで子どもたちは新たな意味を見いだし、自ら学びを広げていく。このような美術館の教育的な意義を求めて、学校や公民館の側から美術館の利用を望む声が出ている。

当近代美術館では、平成19年度の教育普及事業として、鑑賞教育、ワークショップ、美術鑑賞講座、映画鑑賞、職場体験、巡回ミュージアム等を計画した。その中で、学校と連携して実施した「美術館を利用した鑑賞と造形遊び」、及び公民館と連携して実施した「美術館を利用した鑑賞と創作活動」について述べてみる。

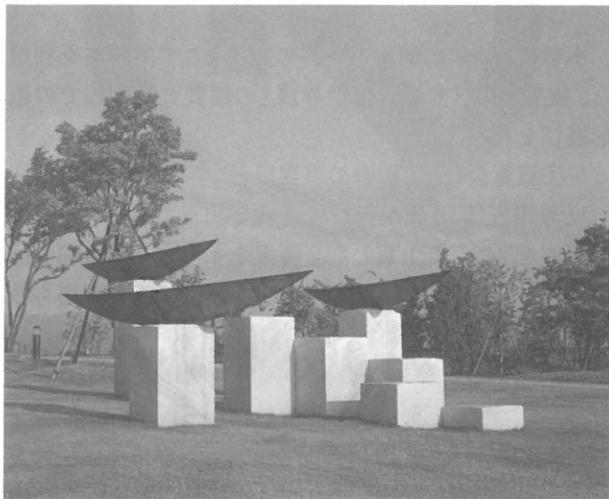


図1 小清水漸《空へ 信濃川から》



図2 前田哲明《Untitled 95-0》

## 2 学校と連携した取組

### (1) 取組の概要

①日時

平成19年6月7日(木) 9:45~13:40

②対象

小学校1・2年児童53名／引率教師4名／学芸員1名

③内容

小学校1・2年の図画工作科の授業として美術館を利用し、展覧会「三芳悌吉の世界展」の鑑賞と美術館での造形遊びを行った。

④展覧会「三芳悌吉の世界展」について

三芳悌吉は、1歳から17歳まで新潟市で育ち、その後洋画家を目指して上京した。写実を基本にした清明な静物画などを描いたが、その一方で絵本や挿絵の仕事も数多く残している。展覧会では、当館所蔵の洋画、絵本の原画、挿絵、ガラス絵など、作家の幅広い制作を紹介した。

【活動1】 野外彫刻に題名をつけながら鑑賞する。

当館には、次の8体の野外彫刻がある。(図1~4) 岡本敦夫《地殻 - 海》1995年、小清水漸《空へ 信濃川から》1995年、中岡慎太郎《FANTASY》1995年、前田哲明《Untitled 95-0》1995年、青木野枝《亀池・蓮池》1997年、竹田康宏《Under the leaves 97D Nagaoka "Do you love me ?"》1997年、舟越直木《夏の夜》1997年、松井紫朗《Voice-Scope》1997年。

これらの野外彫刻を、散策しながら鑑賞した。作家がつけた題名にこだわらず、子どもが作品から受けた印象を基に、自分らしい題名をつけ、どうしてその題名をついたか後で発表し合った。また、作品に直接手で触って素材の感触を味わい、作品の上に上がったり、中に入ったりすることによって肌で作品を感じ取らせ、子どもたちは作品や周りの景色と一緒にしていた。作品への思いをつぶやき、友だちとの交流も広がった。松井紫朗の《Voice-Scope》(図4)では、声を出し合い、耳を当てて代わる代わる交信を楽しんでいた。引率教師や学芸員は、適宜子どもたちに問い合わせ、子どもらしい見方や感じ方を受け止め、共感を示すようにした。ゆったりと自分のペースで鑑賞することができた。

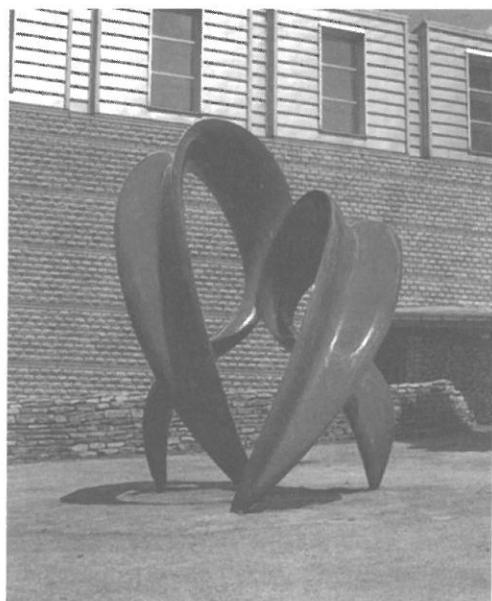


図3 竹田康宏《Under the leaves 97D Nagaoka "Do you love me ?"》

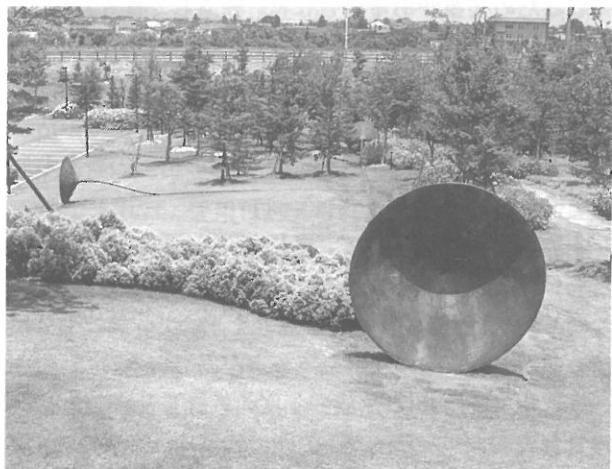


図4 松井紫朗《Voice-Scope》

### 【活動2】 野外彫刻の画像を見ながら振り返る。

講堂に戻り、見てきた野外彫刻の画像を見ながら、印象を思い起こし、つけた題名を紹介して、それぞれの思いを共有した。見方や感じ方が違っていいこと、自分らしさを大事にしながら友達の考えも認め参考にすることのよさを伝えた。

### 【活動3】 美術館利用の注意事項を考える。

公共施設としての美術館を利用するに当たり、みんなが気持ちよく、いつまでも楽しく作品を見ることができるようにするための約束ごとを考えた。子どもたちから意見を引き出し、ヒントのマーク(図5)などを紹介した。作品を大切に守っていくという視点を大事にした。

### 【活動4】 常設展「三芳悌吉の世界展」の解説を聞きながら鑑賞し、気に入った作品をスケッチする。

常設展「三芳悌吉の世界展」では、三芳悌吉の絵本『ある池のものがたり』(図6)の原画を全て展示した。この話は、新潟市に実際にあった「異人池」を題材にしたものである。作品を身近に感じるために、事前に学校で読み聞かせをしてもらった。

井戸から湧き出る水で池ができる場面や火災に見舞われた場面、当時の子どもたちが釣りやスケートをして遊んでいる場面などに子どもたちは興味をもって見入り、スケッチをしていた。(図7)家に帰ってからスケッチの続きを描いた子どももいた。

### 【活動5】 屋外で造形遊びをする。(図8~13)

学校側から、野外彫刻をつかった造形遊びをしたいという要望があった。そこで、青木野枝の作品《亀池・蓮池》に身近な材料を付け加えて色や形や空間のおもしろさを味わい、仲間とかかわりながら自分たちの思いを宇宙にひびかせるという活動を提案した。題材名は、『○○小学校から宇宙にひびけ』。これを、バナーに記して子どもたちの意欲と発想を喚起しようとした。(図8)

使った材料は、美術館にストックしてある身近な物で、布、紙、ビニールひも、段ボールなど。子どもたちは、これらの材料を組み合わせ、つなげる、編む、貼る、組み立てるなどの手を加え、新たな色と形の世界をつくり出していった。中には、同じ形の段ボール片を《亀池・蓮



図5 注意喚起のマーク



図6 絵本：三芳悌吉『ある池のものがたり』福音館書店 2007年



図7 「三芳悌吉の世界展」鑑賞場面

池》に数多くリズミカルにはめ込んだものもあった。

子どもたちは、互いの思いを交流し、アイディアを出し合い、力を合わせてイメージを具体化していった。材料の特性を体で感じ、それを遊びや表現に生かしていた。造形遊びの基になる《亀池・蓮池》と自分たちの思いを材料でつなげ、新たな意味が浮かび上がった。

## (2) 評価と改善点

絵本の原画『ある池のものがたり』の鑑賞に当たっては、事前に学校で話を聞いていた。この話は、三芳悌吉が新潟市で育ったころ、実際にあった「異人池」ができるからなくなってしまうまでを描いたものである。子どもたちにもなじみのある水彩画で、ところどころ図鑑のようにして生き物や当時の道具などが精密描写されている。

子どもたちには、作者自身の楽しかった思いや池が地域の人たちに愛され大事にされていたことを話と結び付けて感じ取ってほしいと願った。子どもたちは、興味をもって見入り、気に入った場面をスケッチしていた。

造形遊びでは、材料の特性を生かして使い方・表し方の発想を広げ、工夫していた。活動の過程で子ども同士のかかわりが生まれ、学び合う姿が見られた。

子どもたちからは、次のような感想があった。「美術館は素敵なところです。」「美術館がすっごく好きになりました。」「美術はすごいということが分かりました。」「思い出すとまた絵を描きたいと思います。自分でスケッチがあまりうまくないと思います。もっともっと上手になりたいです。」「教えてくれたことをお父さんやお母さんに教えてあげました。また行くかもしれません。」

ゆったりとした時間の中で、伸び伸びと体験することを通して美術館のよさを味わった子どもたちは、美術館そのものに興味をもち、好きになる子どもが増えた。新たな希望や意欲をもつ子どももいた。うれしい体験は誰かに伝えたい。実際に、次の日曜日に親子で来館された家族があった。親の理解と行動力も素晴らしい。この子は、ますます美術館に興味をもっていくだろう。こんな家族を増やしていくように、学芸員として努めていきたい。

個々にねらいが達成されたかは、十分には把握できなかった。造形遊びの内容は、主に学芸員が考えたが、子



図8 題材名を記したバナー



図9 違う材料を組み合わせて素敵な模様に



図10 模様を貼ったり、描いたりして新たな飾りをつくる

どもの実態を事前にとらえて、教師の願いを前面に引き出す必要があった。また、教師による評価結果を具体的に教えてもらい、今後に生かす努力をしていかなければならない。

### 3 公民館と連携した取組

#### (1) 取組の概要

##### ①日時

平成19年8月21日(火) 10:00~15:00

##### ②対象

小学校3~6年児童8名／引率職員7名／学芸員1名

##### ③内容

隣接する2つの地域の公民館が共同主催し、夏休みに「美術館見学と創作体験」の事業を計画し、地域の子どもたちを募って行った活動。

##### ④事業の趣旨

展覧会「藤城清治 光と影のファンタジー」の作品の話を聞き、じっくりと鑑賞し、自分の世界を広げていく楽しさを味わう。さらに自分のイメージを表現する場を設け、世界で一つしかない作品をつくる。

##### ⑤展覧会「藤城清治 光と影のファンタジー」について

藤城清治は、光と影によって生み出される「影絵」の世界を、独自の表現で芸術として広く浸透させた。展覧会では、初期のモノクロームの作品から80歳を過ぎての最近作まで、半世紀以上に及ぶ影絵制作の軌跡を振り返った。約150点の作品を、鏡や水を使い、幻想的な世界を演出した。

#### 【活動1】企画展「藤城清治 光と影のファンタジー」の解説を聞く。

展覧会場は、他の来館者も多く、造作の関係上も現場での解説が難しかった。また来館者から、影絵の仕組みや作品のつくりについての質問が寄せられていた。影絵と切り絵の違いに疑問をもったり、造作の中の様子に興味をもったりする人が多かった。

そこで、当日は講堂にて作品画像を投影しながら解説をするとともに、試作した影絵(図14)を紹介して、使っている材料や影絵の仕組み、光と影の関係を説明した。ま



図11 協力してつくった部屋



図12 できばえを上から確かめる子どもたち

た、会場構成の模型を投影し、会場全体の演出に込められた作家の思いを伝えた。

**【活動2】 展覧会「藤城清治 光と影のファンタジー」を鑑賞する。**

展覧会場では、ゆったりと時間をとて自由に鑑賞してもらった。事前に影絵の仕組みを聞いていたことで、分かりやすく興味がもてたと公民館の職員の方から言われた。

**【活動3】 創作活動**

公民館側で用意した市販のステンドグラスの教材を使って一人一人が創作活動をした。導入での説明は学芸員が行い、創作過程では公民館の職員の方が子どもたちを個々にサポートした。(図15)また、職員の方自身も、子どもたちと一緒に創作活動を行い、楽しさや喜びを共有した。

教材は、透明なアクリル板に貼られた紙に描いた下絵の各部をカッターで切り取り、そこにカラーセロファンを貼るものである。カッターとカラーセロファンを使うところは、影絵と共通するところがあり、鑑賞後の思いと表現のイメージを結び付けることができる教材であった。完成後には、裏面に黒い紙を貼り、ステンドグラス風に仕上がる。

制作途中に、窓越しに作品を太陽にかざした子どもが、床にカラーセロファンのきれいな色と形が浮かび上がることを発見して、嬉しそうにそのことを教えてくれた。下絵の輪郭線の部分が、最終的に黒い縁取りとして表れる。線が太い方が作業としてはやりやすいが、あえて輪郭線をなくし、色面だけで表す独自の方法を追求した子どももいた。また、カラーセロファンを貼り間違えた子どもが、諦めずに同じ箇所を繰り返し修正しながら、よりよく工夫する姿も見られた。それぞれが表現意欲をもち続け、自分らしい表現方法で粘り強く取り組んだ。

**【活動4】 お互いの作品を鑑賞し合う。**

完成までには至らなかったが、できたところでお互いの作品を鑑賞し合った。公民館の職員の方は、自分も一緒に制作をしていたため、子どもたちの感性と表現力の素晴らしさを驚きの目で見取り、それを子どもたちに伝えていた。子どもたちは、満足そうに自分の作品をながめ、友達の作品にも関心を寄せていた。



図13 材料自体の特性を楽しむ子どもたち



図14 学芸員が試作した影絵

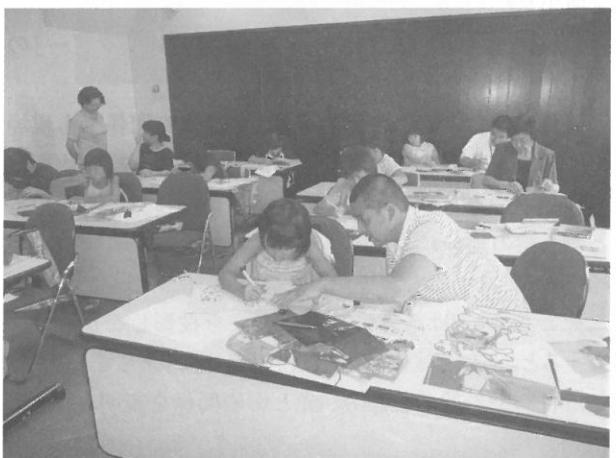


図15 公民館の職員の方が子どもたちをサポート

## (2) 評価と改善点

藤城清治の影絵の展覧会が子どもたちの興味・関心を高め、内容的に類似した創作活動への意欲につながった。創作活動では、公民館の職員がマンツーマンでサポートできる人数であったため、安全も確保でき伸び伸びと活動することができた。

時間が限られていたので、学芸員としても作品の完成まで見届けることができなかった。また、1回きりの公民館事業なので、仕上げは家で行うことになった。事後に公民館の方と話し合いをもち、事業の評価を共有化して次に生かす必要があった。

## 4 今後の課題

美術館は、創造的な雰囲気をたくさん兼ね備えている。その環境を子どもたちのために整備・提供し、学校や公民館と連携して学びをつくり出していく役割が学芸員に求められる。美術館側からその活用の意義を積極的に発信し、学校や公民館が願いを込めた主体的な活動を計画・実施できるような場と時間が必要である。

子どもたちが、見て、感じて、味わう鑑賞活動で得た新たな意味を、同時に美術館の中で表現活動に結び付けることは、子どもたちの感覚を統合し、生きる力の実現へつながると今回の事例を通して感じた。

美術館は、子どもたちにとって伸び伸びと過ごせる楽しい場でありたい。そして、学びが生まれる喜びの場でありたい。そのためにも、子どもたちと作品、作家、来館者、美術館との「つながり」を深める工夫と努力を続けていきたい。

(新潟県立近代美術館 主任学芸員)



図16 試行錯誤しながら工夫して楽しむ子ども